

人の子を信じますか

ヨハネの福音書 9 章 35-41 節

はじめに

ヨハネの福音書 9 章の最初には、生まれたときから目の見えない人を、イエス様が癒し、その目を開かれるという出来事が書かれています。しかし、イエス様が彼の目を開いたその日は、「安息日」であったのです。律法には、安息日には「いかなる仕事もしてはならない」と書かれています。厳格に律法を守るパリサイ人たちは、イエス様が彼の目を開いたその行為を、「仕事」と見なしたのです。彼の目を開くということを、医療行為と見なしたのです。彼らは、命に関わる医療行為以外は、安息日にはしてはならないと考えていたからです。またイエス様が彼の目を開かれる時、唾を吐いて泥を作り、その泥を彼の目に塗られました。その行為も、土の壁を作る時の建築の「仕事」と似ているため、彼らは「仕事」と見なしたのです。

パリサイ人たちは、イエス様のことを「罪人」と判断しました。なぜならイエス様のことを、安息日の律法を守らない人だと考えたからです。しかしイエス様に目を開けていただいた彼は、パリサイ人たちの前で「イエス様は罪人ではない、預言者だ、神様から遣わされた者でなければ、生まれつき目が見えない者の目を開けることなどできない」と堂々と証言したのです。当時、パリサイ人たちは、イエス様をキリストだと告白する者を、会堂から追放すると決めていました。「会堂から追放される」というのは、ユダヤ教から異端扱いされ、戒規にされるということです。そしてユダヤ人の社会から締め出されることを意味します。彼は、パリサイ人たちからどんなに脅され、説得されても、「イエス様は罪人ではない、神様から遣わされた預言者だ」と証言し続けました。その結果、彼は会堂から追放されてしまったのです。彼はイエス様を、あくまでも擁護しました。しかしその結果、ユダヤ人の宗教と社会から締め出されてしまったのです。彼はその後、どのように生きていけばよいのでしょうか。せっかく目が開かれたのに、社会から孤立して生きなければならなくなったのです。せっかく目が開かれたのに、彼に待っていた現実は、非常に厳しいものだったのです。

1. あなたは人の子を信じますか

しかしそんな彼のもとに、イエス様が再び現れるのです。35 節には、こうあります。「**イエスは、ユダヤ人たちが彼を外に追い出したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。『あなたは人の子を信じますか』**」。イエス様は、彼がユダヤ人の宗教と社会から締め出されたことを聞いて、彼を見つけ出して、彼のもとにやって来るのです。イエス様は、彼を見捨てないのです。イエス様を擁護した彼を、わざわざ探して、彼に言葉をかけるのです。

イエス様は、御自身を擁護し、御自身への信仰を貫く人たちを決して見捨てないのだと思います。クリスチャンとして真実に、また誠実に生きようとする時、私たちにはあらゆる衝突が生まれます。時には家族と、あるいは職場と、または親しい友人と。その時に、私たちは、必ずしも、いつでも信仰を貫けるというわけではないかもしれません。時には妥協したり、時には信仰を貫いたりを繰り返しながら生きているのではないかと思います。しかし私たちが忘れてはならないのは、イエス様への信仰を貫く者たちを、イエス様は決して見捨てないということです。探し出して、見つけ出して、言葉をかけてくださるということです。

ではイエス様は、彼にどんな言葉をかけられたのでしょうか。それは、「あなたは人の子を信じますか」という言葉です。イエス様は彼に、「人の子」への信仰を求められたのです。

「人の子」というのは、旧約聖書のダニエル書 7 章に出てくる表現で、天の雲とともに来られて、最後の審判をされる存在です。それは、「救い主」「キリスト」をも意味する言葉です。彼はイエス様に、「その『人の子』とは、どなたですか」と問います。するとイエス様は、「**あなたはその人を見えています。あなたと話しているのが、その人です**」と言われて、御自身こそ、「人の子」である、「救い主」「キリスト」であることを明らかにされたのです。すると彼は、「**主よ、信じます**」と言って、イエス様を「**礼拝した**」のです。

イエス様は、生まれたときから見えなかった彼の目を開かれました。しかしイエス様が開かれたのは、彼の目だけではありませんでした。イエス様は、彼の心の目も開かれたのです。また彼の信仰の目も開かれたのです。そして、イエス様がどういう方かが、はっきりと見えるようにされたのです。

彼が生まれた時から目が見えないというのは、私たち人間の姿を象徴的に表しています。聖書によれば、私たち人間は、生まれた時から霊的に盲目なのです。神様が見えないのです。イエス様が見えないのです。神様がどういう方か、イエス様がどういう方かが分からないのです。ですから、神様なんていないと言ってみたり、ナザレのイエスは愛を説いた聖人だとか、革命家だとか言ってみたりするのです。私たちは、イエス様が「人の子」であること、「救い主」「キリスト」であること、もっと言えば、天から遣わされた神の子、神御自身であることが分からないのです。生まれた時から心の目、信仰の目が閉じていて、霊的に盲目なのです。それゆえに、イエス様がどういう方が見えないのです。

では私たちは、どうして今、イエス様を礼拝しているのでしょうか。それは、イエス様が彼の目を開けたように、私たちの心の目、信仰の目、霊的な目を開けてくださったからではないでしょうか。生まれた時から目が見えない人の目を、見えるようにするのは、現代の医療でも困難なことではないでしょうか。医学的な詳しいことは分かりませんが、先天的な視覚障がいを持っている人の目が、見えるようになるというのは、ほとんど不可能ではないでしょうか。もしできるとすれば、神様の奇跡以外にはないのではないのでしょうか。私たちの心の目、信仰の目、霊的な目も、生まれた時から閉じているものです。ですから、人間の力では決して開けられないのです。自分の力では、神様やイエス様が見えないのです。神様がどういう方か、イエス様がどういう方が見えないのです。見えるとすれば、神様の奇跡以

外にはないのです。イエス様の恵み以外にないのです。

多くの人は、神様なんていない、ナザレのイエスは愛を説いた聖人に過ぎないと言います。しかし私たちには見えるのです。神様が天地を造られた方であること、今も生きていてこの世界と私たちの人生を導いておられることが。またイエス様がただの人間ではなく、天から遣わされた神の子であり、私たちの罪を贖うために十字架で死なれ、三日目に復活された救い主であることが。また世の終りには、最後の審判をするために再びこの世に来られることが。私たちが見えるとすれば、それはただただ、神様の恵みによるのです。

2. 私たちも盲目なのです

39 節でイエス様は、こう言われます。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです」。イエス様はここで、心の目、信仰の目、また霊的な目のことを言っておられます。イエス様がこの世に来られたのは、私たちの霊的な目を開くためだったのです。

この言葉を聞いたパリサイ人たちは、イエス様にこう言います。「私たちも盲目なのですか」。パリサイ人たちは、自分たちが盲目だとは思っていません。つまり、自分たちは心の目、信仰の目、また霊的な目が開いていると思っているのです。パリサイ人たちは、自分たちのことを「目の見えない人の案内人、闇の中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師」だと思っていたのです（ローマ 2：19）。彼らは、自分たちは健全な目を持っている、すべてが見えている、神様のことも、ナザレのイエスのこともすべて見えている、どんなことでも正しい判断ができる、だから自分たちは霊的な盲人たちの案内人であり、光、導き手、教師だと思っているのです。しかしイエス様は、彼らもまた霊的な盲人だと見ているのです。イエス様は、マタイ 15：14 で、パリサイ人たちについてこう言われています。「彼らは盲人を案内する盲人です。もし盲人が盲人を案内すれば、二人とも穴に落ちます」。彼らは、自分たちが霊的な盲人であることに気づいていないのです。

41 節でイエス様は、彼らにこう言われます。「もしあなたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります」。彼らは、自分たちは「見える」と思っているのです。自分たちが盲目であることに気づき、それを素直に認めていれば、イエス様に目を開けていただくこともできたのです。しかし彼らは、自分たちは盲目ではない、神様のこともナザレのイエスのこともすべて見えている、自分たちはどんなことでも正しい判断ができている、そう思っていたため、イエス様に目を開けていただくことができなかったのです。イエス様が 39 節で、「見える者が盲目となるためです」と言われたのは、そういう意味です。「自分は見える」と思っている人は、霊的な盲目のままです。

彼らは、自分たちは正しい目を持っていると思っていました。その目を通して、イエス様を「罪人」と判断し、生まれた時から目が見えなかった彼のことも、「罪の中に生まれた人」と判断しました。彼らは、自分たちの目を通して、イエス様をさばき、彼のこともさばいた

のです。彼らの問題は何でしょうか。彼らの一番の問題は、自分たちのことが見えていないということではないでしょうか。彼らは、心の目、信仰の目、霊的な目が閉じているため、自分たちの姿が見えていないのです。

私たちも、もしかしたら自分の姿が一番見えていないのかもしれませんが。私たちは、周りの人の姿はよく見えます。周りの人がどんな顔をしているのか、どんな体型をしているのかなどは、よく見えます。しかし私たちは、自分の姿はよく見えません。鏡がないと自分の姿が分からないのです。皆さん、もしこの世に鏡がなかったらどうでしょうか。もしこの世に鏡がなかったら、自分の顔がどんな顔をしているのかが分からないのではないのでしょうか。また自分の体型、全体的にどんな体型をしているのかも分かりません。また後ろ姿も分かりません。私たちは、人のことはよく見えるのです。だから、あの人はああだ、こうだと人をさばくのです。私たちは、自分のことが一番見えていないのかもしれませんが。私たちにとって大切なのは、鏡を持つことです。自分の姿をはっきりと写し出す鏡を持つことです。鏡を持たなかったら、私たちはいつまでも自分の姿が分からないのです。

イエス様は、私たちの鏡となってくださる方ではないかと思います。「あなたの姿はこうだ」と私たちの姿をはっきりと写し出し、教えてくれるのは、イエス様ではないのでしょうか。イエス様がいないと、私たちは自分の姿が分からないのです。自分が霊的に盲目であることが分からないのです。自分が何も見えていないことが分からないのです。

イエス様は、ヨハネの黙示録の 3 章で、ラオディキアにある教会にこう言われました。**「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買い、あなたの裸の恥をあらわにしないために着る白い衣を買い、目が見えるようになるために目に塗る目薬を買いなさい」**(黙示録 3:17-18)。私たちは、自分の姿が分からないのです。イエス様はここで、教会に向かって、つまりクリスチャンに向かって、こう言っているのです。私たちは、クリスチャンになっても自分が見えなくなってしまうのです。しかし、イエス様は私たちの本当の姿が見えているのです。大切なのは、私たちは、イエス様を見るということです。イエス様が見える時に、私たちは自分の姿も見えてくるのだと思うのです。なぜならイエス様が、私たちの本当の姿を教えてくださいからです。

おわりに

私たちは、自分の姿が見えているのでしょうか。私たちは、自分が何者であるかが見えているのでしょうか。私たちは、人のことばかりよく見えるので、いとも簡単に人をさばきます。しかしさばきをなさるのは、イエス様だけです。イエス様こそ正しい目をもって、正しい判断をされます。私たちは、イエス様が見えるようになると、自分の姿も見えてくるのです。どうか、イエス様に私たちの心の目、信仰の目、霊的な目を開いていただきましょう。イエス様こそ、神様から遣わされた神の子、また神様御自身であることが見えるように。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは生まれつき盲目です。私たちの目は、暗闇に包まれ光を見出せませんでした。あなたのことが見え、イエス様のことも見えませんでした。それゆえに、自分が何者であることかも分からず、ただひたすら人をさばいてばかりでした。

どうか、私たちの心の目、信仰の目、霊的な目を開いてください。神様のこと、イエス様のことがはっきりと見えるようにしてください。そして、自分のことも見えるようにしてください、私たちの人生に光を与えてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。